

---

## 18 世紀ベルリンにおける亡命ユグノーの出版者たち

——R. ロジェと A. デュサラによる『ダヴィッド詩篇集』の出版をめぐる

七條めぐみ 愛知県立芸術大学音楽学部非常勤講師（音楽学）

---

### 1. はじめに

16 世紀半ばからフランスで急速に人口を増やしたプロテスタントの一派である改革派教徒（ユグノー）は、王権から異端と見なされ、17 世紀後半には約 20 万人がフランス国外に亡命したと言われる。この大規模な人口流出により、工業資本が国外にもたらされ、フランスの経済的な衰退を招いた。そのため、ユグノーの離散（ディアスポラ）の影響はこれまで、近世・近代ヨーロッパの経済史の中で重要な関心事となってきた<sup>1</sup>。ただし、亡命ユグノーの中には、商工業だけでなく文筆業に従事したり、楽譜出版やオペラ上演に携わったりするものもいたが、従来のユグノー研究では、このような文化的な活動に着目することは少なく、彼らの貢献はもっぱら経済面や商業面にあったとされてきた。

そこで本稿では、亡命ユグノーの文化的貢献に着目し、彼らが国際的な影響力をもった書籍・楽譜出版業に目を向ける。中でも、ユグノーの出版者としてベルリンで活動したロベール・ロジェ Robert Roger（生没年不詳）とアルノー・デュサラ Arnaud Dusarrat (ca.1666-1733) の経歴と活動、音楽関連の出版物である『ダヴィッド詩篇集』を取り上げる。彼らはベルリンへ移住したフランス人書籍業者の中でも、その活動をプロイセン王に公式に許可され、プロテスタント系書物の印刷家として重要な位置を占めていた。しかし、ユグノーの国際的な商業・文化的営みから彼らの出版活動を捉える研究は行われていない。また、彼らが出版した『ダヴィッド詩篇集』は一般的には「ジュネーヴ詩篇歌」の名で知られ、改革派教会の礼拝で歌われる讃美歌集である。詩篇歌に関しては、16 世紀の宗教改革におけるフランス語訳の編纂や曲付けについては豊富な研究が存在するものの、その 18 世紀における伝承はほとんど注目されることがない。本稿では、R. ロジェとデュサラのユグノー出版者としての特徴を整理した上で、『ダヴィッド詩篇集』の構成と序文等の内容を検討することに

より、詩篇集がどのような目的で出版されたのかを考察する。

## 2. 18 世紀ベルリンの出版業における亡命ユグノー

### (1) ベルリンにおける書籍・楽譜出版業の興隆

ベルリンでは 17 世紀後半～18 世紀にかけての人口増加にともない、印刷・製本業者の数が急激に増加した。ある統計では、1690 年には街の人口約 21500 人に対して 2 名の印刷業者しかいなかったが、1750 年には人口約 113000 人に対し、印刷業者は 11 名に増加したという<sup>2</sup>。そのような中で、ベルリンに亡命したユグノーたちは当初、印刷業者よりも登録が容易な製本業者として書籍産業に参入した。ガイスラーによると、1678 年には 7 名だった製本業者が 10 年後には 15 名になり、1689 年にはそれ以上製本業者が増えないように、ギルド（組合）を 6 年間閉鎖しなければならないほどだった<sup>3</sup>。ユグノーたちはこうして出版業に加わり、のちに書籍販売や貸本業へと手を広げていった。

一方で、ベルリンにおける楽譜出版業の発展は、書籍出版に比べ半世紀ほど遅く、1750 年以降に見られる。これはドイツ全体の楽譜出版業の傾向と言える。17 世紀～18 世紀前半までは、ルンゲ、ロレンツ、ザルフエルトらによる宗教音楽の出版が行われたが、いずれも活版印刷であり、イギリスやオランダで導入が進んでいた彫版印刷は用いられていない。器楽分野では、プレトリウス (1616) や、ブレイド (1621) による合奏組曲、ロイスナーによるリュート曲集 (1676) が挙げられる程度だった。すなわち、書籍出版において台頭しつつあったユグノーたちが楽譜出版にも参画する余地は十分にあったことが推測される。

### (2) R. ロジェとデュサラの経歴と活動

ロベール・ロジェはフランスのノルマンディー地方・ルーアンに生まれ、ベルリンへ移住後、出版者として活動し、のちにアムステルダムへ移り 1720 年以降に亡くなった<sup>4</sup>。書籍業者としては、1688 年にフリードリヒ 1 世よりフランス語書物の出版に対する免許 (Privilège) を獲得し、「選帝侯の印刷家かつ書籍商」の称号、1701 年からは「王の印刷家かつ書籍商」の称号で活動した。R.

ロジェがベルリンで活動した期間は長くなく、1704年までには親族の印刷業を手伝うためにアムステルダムへ拠点を移したと言われる。その際、ベルリンで行っていた印刷業は同じくフランス語書物の書籍業者であるアルノー・デュサラとヨハン・ヴェッセル Johann Wessel に引き継いだ。また、1707年以降の出版物はロンドンで出されていることから、海を渡りロンドンへ移った可能性も考えられる。

筆者はこれまでに、R. ロジェの出版物に関してベルリン州立図書館、ベルリン＝フランス教会図書館<sup>5</sup>、パリのプロテスタンティズム史協会図書館で所蔵調査を行った。その結果 57 点の書物が確認され、そのうち 1 点をのぞく全てがフランス語で書かれていた。出版地に関しては、ベルリンが 37 点、アムステルダムが 14 点、ロンドンが 5 点、出版地不詳が 1 点<sup>6</sup>である。その内容は、ユグノー移民とブランデンブルクの歴史に関わるものや、プロテスタントの教義に関するものが多い。中でも、シャルル・アンシヨンの『ブランデンブルク国におけるフランス人難民の定住史』（1690）を R. ロジェが出版したことは注目に値する。この書物は、ベルリンにおけるユグノーの移住について、それが起きた同時代に書かれた数少ない史料であり、以後数世紀にわたって読み継がれることで、ドイツに住むフランス人たちの歴史的記憶の生成に貢献したとされる<sup>7</sup>。R. ロジェは他にも、プロテスタント神学者ピエール・ジュリュヤ《ガゼット・ド・ベルン》を編集したアントワーヌ・テシエなど、著名なユグノー文筆家の書物を出版している。

一方、デュサラはフランス南西部のペアルヌ出身で、父ピエールと息子のジャンもまた書籍業者という一家だった。デュサラは 1693 年からベルリンで製本業者として活動し、1701 年頃から出版業にも参入した。この頃から R. ロジェとの同業者としてのつながりがあり、1702 年には後継として允許を獲得するが、1704 年にヴェッセルにそれを売り渡している。デュサラはしばらくヴェッセルとの共同出版を行ったのち、1713 年 4 月 13 日にフランス語書物の印刷に対する国王からの允許を得た。ただしその後、彼の印刷業は複数の人物によって引き継がれる。ヨハン・トーマス・トラー（1717 年）、ジャン・グリノイス（1721 年）を経て、ゲオルク・ヤーコプ・デッカー（1755 年）である。最後に引き継いだデッカーは 19 世紀まで続く大出版社となるのだが、その源

流がユグノー移民であるデュサラにあった。

デュサラの出版物に関しては、上述した三つの図書館において 23 点が確認され、その全てがフランス語によって書かれ、ベルリンで出版されたものである。書物の内訳は R. ロジェと同様、ユグノーの迫害の歴史やブランデンブルクの歴史を綴ったものが中心で、中には旧約・新約聖書をまとめたものも確認される。

また、デュサラはアムステルダムで楽譜出版者エティエンヌ・ロジェ Estienne Roger (1665/66-1722) のベルリンにおける代理人でもあった。E. ロジェの 1708 年の出版カタログには「宮廷の書籍商・印刷家」としてデュサラの名前が掲載され、1712 年と 1716 年のカタログでも代理人として言及されている。つまり、デュサラが E. ロジェの出版する楽譜や書物を、カタログを介してベルリンで販売していたということだ。こうした代理販売は、遠く離れた土地に出版物を流通させる手段としてオランダやイギリスの書籍業者で広く用いられていた制度である。E. ロジェは楽譜出版者でありながら書籍業者の流通方法を取り入れることで、国際的な販路を獲得したのだが、その際ベルリンではデュサラが窓口となっていたのである。E. ロジェの出版物はイタリア、フランス、イギリスの幅広い音楽作品を含み、最新の彫版印刷技術によって製作されていたことから、デュサラによる楽譜販売は、ベルリンの人々にとって新しい音楽文化への接続口であったことが推測される。

以上のように、R. ロジェの活動とデュサラの協力関係を見ると、彼らはベルリンのローカルな出版者として活動するだけでなく、国際的な言論空間や書籍流通網の中で機能していたことが分かる。その背後には、亡命ユグノーたちの国際的な人的・商業ネットワークがあったことは確かだろう。

### 3. R. ロジェとデュサラによる『ダヴィッド詩篇集』の出版

#### (1) 1701 年～31 年に出版された詩篇集の内訳

『ダヴィッド詩篇集』は R. ロジェとデュサラによる唯一の音楽関連出版物である。出版は 1701 年から 31 年にかけて行われ、その内訳は表 1 (次ページ) の通りである。

1701 年には R. ロジェとデュサラによって合計六つの『ダヴィッド詩篇集』

表1 1701年～1731年にR.ロジェとデュサラによって出版された詩篇集一覧

出版者	記号*1	タイトル	出版年	判型	ページ数*2	所蔵*3
R. ロジェ	En 1331	Les Pseaumes En Vers, Avec La Liturgie, le Catéchisme, et la Confession de Foi des Eglises Réformées	1701	8°	497	StB
	En 1332	Les Pseaumes De David En Vers, Avec La Liturgie	1701	8°	704+96	StB, FKB
	En 1333	Les pseaumes de David	1701	8°	530	逸
	En 1335	Les pseaumes de David en vers	1701	8°	544	逸
	En 1336	Les Pseaumes De David En Vers	1701	8°	474	逸
	En 1340	Les Pseaumes de David	1701	8°	418	SHPF
デュサラ、 グェッセル	Bw 1848	Les Pseaumes De David En Vers, Avec des Oraisons, la Liturgie, le Catéchisme, & la Confession de Foi des Eglises Réformées	1704	4°	137+48	StB
	En 1400	Les pseaumes en vers avec la liturgie, le cat., et la conf. de foi	1711	8°	不明	逸
デュサラ	SA 431	Les Pseaumes De David	1730	*4	344	StB, FKB
	En 1488	Les Pseaumes de David en vers, avec la liturgie	1731	8°	606+60	FKB

\*1: 本稿ではベルリン州立図書館での請求記号を識別のために用いる。なお、Lenz1932のリストには、En 1333, Bw 1848, SA 431は記載がない。

\*2: 改訂などの理由でページ番号が新たに付けられている場合は、+で記した。

\*3: StBはベルリン州立図書館、FKBはベルリン＝フランス教会、SHPFはプロテスタントインテリゲンツム史協会を表す。また、「逸」は戦争による消失を意味する。

\*4: SA 431はマイクロフィッシュのため、判型は不明である。

が出版された。R. ロジェによる版はベルリン州立図書館に五つのバージョンがあったが、そのうち三つ (En 1333, En 1335, En 1336) は第二次世界大戦により失われた。図書館の所蔵記録と、1932年に刊行されたレンツの研究によると、これらはすべて8つ折り判で、ページ数は474から800までかなりの幅があるが、詩篇集の序文として「地方教会会議の抄録」を含む点で共通している。また、現存する二つのバージョン (En 1331, En 1332) のうち、En 1331には無記名の「緒言」が付けられ、そこで詩篇集の成立と歴史的価値について述べている<sup>8</sup>。

1701年のデュサラによる版 (En 1340) は8つ折り判により、418ページからなる。R. ロジェによるどの版よりもページ数が少ないのは、詩篇集の序文をまったく含まないからである。デュサラ版はこのほかに、1704年 (Bw 1848)、1711年 (En 1400)、1730年 (SA 431)、1731年 (En 1488) のものが確認されており、そのうち1711年版以外が現存する。判型は、1704年版のみが4つ折り、その他は8つ折り判である。また、1704年版にはR. ロジェによる版 (En 1332) と共通する文言が含まれるものの、削除あるいは変更された部分も見られる。一方で、1730年版は8つ折り判ながら344ページと比較的短く、1704年版に見られる序文や教義的内容がすべて省略されている。

ベルリンではR. ロジェとデュサラ以外にも、1723年にゴットハルト・シュレヒティガー Gotthard Schlechtiger<sup>9</sup>、1740年と41年にローラン未亡人 Veuve Laurent によってフランス語詩篇集の出版が行われた。シュレヒティガー版 (ベルリン州立図書館所蔵、請求記号: SA 432) はR. ロジェとデュサラに認められていた允許が期限切れとなったため、プロイセン王から新たに20年間の允許を獲得して出版された。この版はレンツが指摘しているように、デュサラ版 (Bw 1848) の再版と見られる<sup>10</sup>。というのも、シュレヒティガー版の「緒言」では刊行の目的について「より正確で、より良質な紙の版」を作り、「公のために詩篇集と新約聖書の価格を調整する」<sup>11</sup> ことだと書かれているが、実質的な内容の変更はほとんど見られないからだ。1740年、41年のローラン未亡人による版は、筆者は現時点で現物を確認できていないが、やはり王の允許つきで出版されたという<sup>12</sup>。

(2) R. ロジェ版 (En 1332) とデュサラ版 (Bw 1848) の構成・相違点

本節では、R. ロジェとデュサラが出版した『ダヴィッド詩篇集』に関して、最も大部で内容が充実している 1701 年の En 1332 を中心に、その構成と序文等を検討したのち、唯一 4 つ折り判で出版され、内容の大幅な変更が見られる 1704 年版 (Bw 1848) との比較を行う。

表 2 『ダヴィッド詩篇集』 En 1332 (R. ロジェ、1701 年) の構成

ページ番号	内容
番号なし	表紙絵
	タイトルページ
	「地方教会会議の抄録」
	允許
	目次
	十戒 (出エジプト記20章より)
	「音楽の原理」
1~689	詩篇第1番~第150番
690~692	十戒 (出エジプト記20章より)
692~693	シメオンの賛歌 (ルカによる福音書第2章29節)
693~696	聖母マリアの賛歌 (ルカによる福音書第1章46~55節、詩篇第103番の旋律つき)
696~699	ザカリヤの賛歌 (ルカによる福音書第1章67~79節、詩篇第116番の旋律つき)
699~704	テ・デウム (詩篇第8番の旋律つき)
番号なし	改訂版目次
36~96	「キリスト教において子供を教育するための教義」

表 2 は、1701 年に R. ロジェにより出版された En 1332 の構成である。本稿では上記の中でも、『詩篇集』の成立に関する情報を含み、その特徴を表す ①表紙絵とタイトルページ、②「地方教会会議の抄録」、③允許、④「音楽の原理」、⑤ 1704 年版での変更点に注目する。

①表紙絵とタイトルページ

表紙絵の上部には、ひざまずいて豎琴を弾くダビデ王の図が描かれている (図 1、次ページ)。下部中央には「ダヴィッド詩篇集」の文言と出版年が刻まれ、その両端には「すべての国よ、神をたたえよ。すべての民よ、詩篇 117 を祝福せよ。すべての人よ、主をたたえよ。すべての民よ、主の栄誉をたたえま

つれ」<sup>13</sup> という詩が配置されている。これは、詩中に言及のあるように詩篇第 117 番「もろもろの国よ、主をほめたたえよ。もろもろの民よ、主をたたえまつれ」<sup>14</sup> に基づくものである。豎琴を弾くダビデ王と詩篇第 117 番による表紙絵は、En 1332 だけでなく 1701 年のデュサラ版である En 1340、1730 年の SA 431 でも共通して見られる。

En 1332 は独立したタイトルページをもち、そこには「ダヴィッド詩篇集、礼拝つき。先行するすべての版に基づきもう一度修正された新版。ベルリンにて、王の印刷家・書籍商ロベール・ロジェの所で。1701 年。陛下の允許つき」<sup>15</sup> と書かれている。「先行するすべての版に基づきもう一度修正された新版」という表現は、1704 年のデュサラ版、1723 年のシュレヒティガー版でも同様に見られる。この意味する所は次の「地方教会会議の抄録」の項で考察する。一方、デュサラ版の中でも En 1340 (1701 年)、SA 431 (1730 年) は独立したタイトルページを持たず、詩篇第 1 番の先頭に「ダヴィッド詩篇集」と書かれているのみである。



図 1.『ダヴィッド詩篇集』の表紙絵

## ②「地方教会会議の抄録」

「地方教会会議の抄録」は正確には、「イル＝ド＝フランス、ピカルディ、シャンパーニュ、シャルトル地方の教会会議の抄録、シャラントンにて、1679 年 4 月 27 日」<sup>16</sup> である。ここでは地方会議が、フランス王の参事官兼秘書官であった「故コンラート氏」に、詩篇集の古い版を「時の経過と慣例によって



生じた言語上の変化に対応させるため」<sup>17</sup>に改訂することを強く望み、それが無事に行われたと書かれている。出来上がった改訂版は、意味の正確さ、表現の明快さや純粹さにあふれ、教会会議によって「人々を教化するのにとても適している」<sup>18</sup>と判断されたという。この記録が1679年付けであること、また教会会議がピカルディやシャラントンなどフランスの地方におけるものであることから、改訂は1701年のR. ロジェ版のために行われたのではなく、それ以前に行われたことが推測できる。

実際、1679年にパリのアントワーヌ・セリエによって出版された『フランス語の詩による詩篇集』のタイトルページには、「王の参事官・秘書官であった故V. コンラート氏により、マロとベーズの旧版を修正された」<sup>19</sup>という文言が見られる。マロとベーズはもちろん、16世紀の宗教改革時に詩篇をフランス語訳し、『ジュネーヴ詩篇集』をまとめた詩人クレマン・マロ Clément Marot (1496-1544) と、神学者テオドール・ド・ベーズ Théodore de Bèze (1519-1605) である。すなわち、1679年に行われた改訂とは、1世紀前に作られた詩篇集を時代に即した意味や表現に変更したものであり、1701年のR. ロジェ版やそれ以降の版で見られる「先行するすべての版」とは、16世紀の『ジュネーヴ詩篇集』や1679年の改訂版を指すと考えられる。また、「もう一度修正された新版」という表現は、改訂版をさらに新しくした版という意味で用いられたものだろう。

### ③允許

允許とは国王が与える許可のことである。En 1332には「プロイセン王兼ブランデンブルク選帝侯の允許」と書かれた、フリードリヒ1世によるフランス語の詩篇集の印刷に対する1701年8月13日付けの許可文が掲載されている。書かれている内容によると、R. ロジェは1696年4月10日にすでに10年間の允許を得ていたが、「その間、この著作を進めるのを妨げられ、1700年12月15日まで完成することができず、そのため允許を生かすことなく期間の半分が過ぎてしまった」<sup>20</sup>。R. ロジェは新たな允許の取得を懇願し、それによって1700年12月15日から向こう10年間において詩篇集の「唯一の印刷家」となることが認められた。彼に損害を与えたり、海賊版を発行し

たりした場合には、「帝国内外のあらゆる印刷家、書籍商、製本業者、その他何者であろうとも」<sup>21</sup>200 ライヒスターラーの罰金が科されることになった。

この許可文の中では、R. ロジエが 1696 年に最初の允許を取得した後、詩篇集の製作をなぜ進められなかったのかは言及されていない。ただし、1696 年は R. ロジエが「選帝侯殿下の印刷家・書籍商」の称号を得た年であり、この頃の出版物には「允許 Privilège」のほかに「許可 Permission」という語も散見される<sup>22</sup>。その後、ブランデンブルク選帝侯フリードリヒ 3 世は、1700 年 12 月 13 日に神聖ローマ皇帝より王の称号を名乗ることを許され、翌年 1 月 18 日にプロイセン王フリードリヒ 1 世となった。それに伴い、R. ロジエは 1701 年から「王の印刷家・書籍商」を名乗っている。すなわち、R. ロジエはブランデンブルク選帝侯がプロイセン王となり、より拘束力の高い允許を発行することができるようになった段階で、詩篇集の出版に踏み切ったのではないかと考えられる。また、En 1332 で言及される新たな允許は 1700 年 12 月 15 日から有効であるのに対し、王による許可文はそれより半年以上遅い、1701 年 8 月 13 日付けである。この「時間差」に関してレンツは、En 1332 よりも前に出版された版 (En 1331) では許可文が 1700 年 4 月 10 日付けでありながら、出版日としては 1700 年 12 月 15 日が刻まれていると指摘する<sup>23</sup>。このような状況を鑑みると、En 1332 において允許の有効期間が 1700 年 12 月 15 日より 10 年間となっているのは、En 1331 の出版に合わせて取得されたためと見ることができる。

#### ④「音楽の原理」

この部分では、譜面を読むことに慣れていない人々のための手引きが、以下の文言とともに 7 段の譜例つきで掲載されている (図 2、次ページ)。

さまざまな音部記号があるため、詩篇集の旋律を自然あるいは通常の音名で歌うことが難しいと感じる人は、以下の方法により、ある音を固定すれば容易に歌うことができる。すなわち、最も下の線をつねに「ド」で始め、歌の開始音にたどり着く。これは、読者や歌手が将来、詩篇集をより正しく、苦勞なく歌うために強く推奨されるものである。<sup>24</sup>

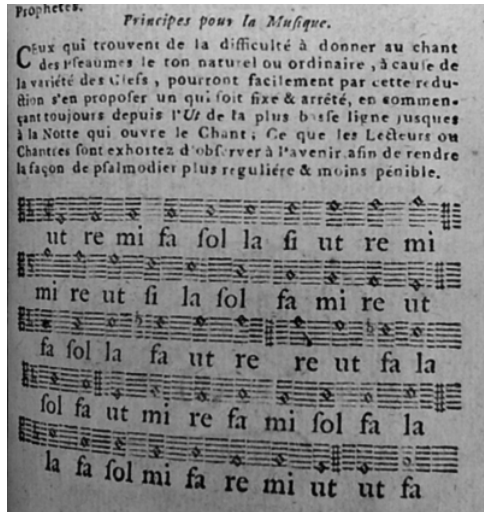


図2.「音楽の原理」部分

要するに、音部記号に合わせて譜読みをするのが難しい場合は、どんな音部記号であろうとも第一線上の音を「ド」で固定し、他の音はそこを起点に読めば良いという手法である。譜例ではアルト記号が用いられ、通常の読み方では「ファ」の音名となる第一線上の音に「ド ut」があてはめられ、音階の上行形や下行形、3度や4度の跳躍進行の例が挙げられている。この手引きに従うことで、音階の順番さえ覚えておけば楽譜を読むことができ、ひいてはより多くの人々が詩篇集を歌うことが可能となったのだろう。なお、1679年にパリで出版された『フランス語の詩による詩篇集』でも全く同じ「音楽の原理」が見られることから、これはR. ロジェが新たに付けたものではなく、先行する版にあるものを踏襲したものと考えられる。

#### ⑤ 1704年版における変更点

1704年にデュサラによって出版された詩篇集は4つ折り判で作られ、全体は188ページからなる。この版では、豎琴を弾くダビデ王の表紙絵と「音楽の原理」が削除される代わりに、改革派教会の教義や礼拝に関する以下の要素が追加された。

40 か条からなる「フランスの改革派教会の合意によってなされる信仰告白」／聖書索引／教会における祈りの作法／洗礼の礼拝について／聖餐の礼拝について／結婚の礼拝について／その他個別の礼拝

また、タイトルページと允許の文言にも変更が見られる。R. ロジェ版のタイトルは「ダヴィッド詩篇集、礼拝つき」だったが、デュサラ版では「ダヴィッド詩篇集、改革派教会の祈り、礼拝、教義、信仰告白つき」となった<sup>25</sup>。允許においては、R. ロジェ版の内容が繰り返された後に、1702年11月4日付けの補足が見られる。そこでは、R. ロジェがプロイセンを去ったため、フリードリヒ1世がデュサラに R. ロジェと同様の允許を10年間認め、罰則に関しても同じ内容を課すことが書かれている。

#### 4. おわりに

本稿では、R. ロジェとデュサラの出版活動を概観した上で、18世紀初めの『ダヴィッド詩篇集』の出版の文脈を整理し、1701年と1704年に出版された二つの版を中心に構成、序文等の検討を行った。それにより、R. ロジェによる『ダヴィッド詩篇集』が17世紀にパリで出版された版を踏襲しながらも、さらなる新版をうたっていること、具体的な罰則をとまなう允許を獲得した版であることが明らかになった。また、デュサラ版に関しては、R. ロジェ版と同じ允許が適用される一方で、読譜の手引きが削除され、改革派教会の教義的な内容が大幅に追加されていることが分かった。これらの各版の特徴には、R. ロジェとデュサラの『詩篇集』に対する姿勢の違いが表れていると考えられる。すなわち、R. ロジェは1688年からフランス語書物の出版を行っていたにもかかわらず、『詩篇集』の出版は1701年を待たねばならなかった。その間、一度は允許を獲得したが出版には至っていないように、『詩篇集』に対する慎重な姿勢がうかがえる。R. ロジェはフランス語による詩篇集をベルリンで初めて出版した人物であることから、その価値づけを慎重に行う必要があったのではないだろうか。一方で、デュサラが1704年に『詩篇集』を出版した時点では、すでに R. ロジェによる複数の版が存在していた。このような経緯から、デュサラ版は R. ロジェ版と重複する内容を削除し、改革派教会の教義的な内

容を盛り込むことで、『詩篇集』をより一層礼拝の実践と結びつけた書物とする狙いがあったと考えられる。

今後は『ダヴィッド詩篇集』の楽譜部分に関して、ベルリンとパリで出版されたものの相互比較を行う必要がある。また、他地域での出版状況にも目を向けることで、18世紀における『詩篇集』の伝承とそれを担ったユグノーの出版家たちの役割について、詳細に明らかにすることが目標である。

注

<sup>1</sup> ユグノーの離散による経済的・商業的影響については次のような研究がある。ウォーラー ステイン、イマヌエル 1990 『近代世界システム 1600～1750 重商主義と「ヨーロッパ世界経済」の凝集』川北稔訳、名古屋大学出版会。金哲雄 2003 『ユグノーの経済史的研究』ミネルヴァ書房。深澤克己 1999 「ヨーロッパ商業空間とディアスポラ」『岩波講座 世界歴史 15—商人と市場 ネットワークの中の国家』岩波書店、181-207頁。

<sup>2</sup> Ernst Crous, 1929, *Der Werdegang des Berliner Buchdrucks*, Berlin, p. 9.

<sup>3</sup> Rolf Geissler, 1988, "Die Hugenotten im literarischen Leben Berlins," In: *Hugenotten in Berlin*. Gottfried Bregulla ed., Berlin, p. 382.

<sup>4</sup> アムステルダムで活動した書籍・楽譜出版者エティエンヌ・ロジェ Estienne Roger (1665/66-1722) もまた、ノルマンディーに生まれたユグノーである。エティエンヌとロベールが親戚関係にあったという確実な証拠はない。ただし、エティエンヌがベルリンやロンドンへ販路を広げていた点、ロベールがベルリン—アムステルダム間を移動している点から、両者が国際的なユグノーのネットワークを共有していた可能性は十分に考えられる。E. ロジェの経歴、楽譜出版活動については、筆者の博士論文に詳しく書かれている。七條めぐみ「アムステルダムにおけるリュリのオペラの組曲版——楽譜出版者エティエンヌ・ロジェ (1665/66-1722) に関する歴史、文献、音楽面からの研究——」博士論文、愛知県立芸術大学およびパリ＝ソルボンヌ大学、2017年。なお、本稿では二人のロジェの混同を避けるため、それぞれ R. ロジェ、E. ロジェと表記する。

<sup>5</sup> ベルリン＝フランス教会図書館については、調査時（2018年夏）に閉館中だったため、司書のロベール・ヴィオレ氏にコンタクトを取り、所蔵状況について教えていただいた。ここに感謝申し上げる。

<sup>6</sup> 1683年に出版された Jean Claude の *Réponse au livre de Monsieur l'évesque de Meaux*

*intitulé Conference avec M. Claude. Divisée en II. Parties.* である。R. ロジェが書籍業者としての活動を始める以前のもののため、別の人物による出版物の可能性もある。

<sup>7</sup> 塚本栄美子 2011 「近世ベルリンにおける『フランス人』の記憶——第一世代シャルル・アンシヨンの歴史書『佛教大学 歴史学部論集』創刊号、51-68 頁。

<sup>8</sup> 筆者は現時点でこの版を参照できていない。レントツは「緒言」に関して、フランス人の教会関係者によって書かれ、R. ロジェが編集したのではないかと推測している。Hans Ulrich Lenz, 1932, *Der Berliner Musikdruck von seinen Anfängen bis zur Mitte des 18. Jahrhunderts*, Hamburg, p. 84. (以下 Lenz 1932)

<sup>9</sup> 「王と科学協会の印刷家」の肩書をもつ人物である。

<sup>10</sup> Lenz 1932, p. 85.

<sup>11</sup> “d’avoir une Editions plus correctes & en meilleure papier“, “de regler le Prix des Pseaumes & du Nouveau Testament, pour le Public“

<sup>12</sup> Lenz 1932, p. 85.

<sup>13</sup> “Toutes Nations Louëz l’Eternel Tous Peuples Celebrez le Ps. 117. Toutes gens Louëz le Seigneur Tous Peuples chantez son honneur“

<sup>14</sup> “Louez l’Eternel, vous toutes les nations, Célébrez-le, vous tous les peuples“

<sup>15</sup> LES / PSEAUMES / DE DAVID / EN VERS, / AVEC LA LITURGIE. / Nouvelle Edition retouchée une derniè- / re fois, sur toutes celles qui / ont précédé. / A BERLIN, / Chez Rober Roger, Imprimeur / & Libraire du Roi. / M. DCCI. / Avec Privilège de Sa Majesté. (斜線は改行を示す)

<sup>16</sup> “Extrait des Actes du Synode Provincial de l’Isle de France, Picardie, Champagne, & Pais Chartrain, assemblé à Charenton, le vingt-septième Avril, 1679“

<sup>17</sup> “pour l’accomoder aux changemens que le temps & l’Usage ont apportez à la langue“

<sup>18</sup> “trés-propre pour servir à l’édification publique“

<sup>19</sup> “Retouchez sur l’ancienne version de CL. MAROT & de TH. DE BEZE, Par feu M. V. CONRART Conseiller & Secretaire du Roy“

<sup>20</sup> “ayant été empêché d’avancer cet Ouvrage dans ledit temps, ne l’ayant pû même achver avant le 15. de Décembre de l’Année 1700 à raison de quoi la moitié du temps dudit Privilège s’est écoulée ; sans qu’il en ait pû profiter“

<sup>21</sup> “à tous & chacun Imprimeurs, Marchands Libraires & Relieurs de Nos Etats, tant dedans

que dehors l'Empire & à tous autres, quels qu'ils puissent être“

<sup>22</sup> 例えば、1698年に出版された『ジャン＝バティスト JEAN BAPTISTE EN VERS HEROIQUES. Par Monsieur V\*\*\* A BERLIN, Chez ROBERT ROGER, Imprimeur & Libraire de S. A. E. M. DC. XCVIII. AVEC PERMISSION』(プロテスタンティズム史協会図書館所蔵、請求記号：8° 11 712/3 Rés)

<sup>23</sup> Lenz 1932, p. 84.

<sup>24</sup> “Ceux qui trouvent de la difficulté à donner au chant des Pseaumes le ton naturel ou ordinaire, à cause de la variété des Clefs, pourront facilement par cette réduction s'en proposer un qui soit fixé & arrêté, en commençant toujours depuis l'ut de la plus basse ligne jusqu'à la Note qui ouvre le Chant ; Ce que les Lecteurs ou Chantres sont exhortez d'observer à l'avenir, afin de rendre la façon de psalmodier plus régulière & moins pénible. “

<sup>25</sup> “PSEAUMES / DE DAVID, / EN VERS, / Avec les Oraisons, la Liturgie, le Caté- / chisme, la Confession de Foi / des Eglises Réformées. “